

経済地理メモ——社会主義国編——

⑥ ユーゴスラビア

資料情報係
Information Service Section

国名 ユーゴスラビア社会主義連邦共和国 (Socijalistička Federativna Republika Jugoslavija)

面積 25.6万 km²

人口 2,200万人

首都 ベオグラード (Beograd)

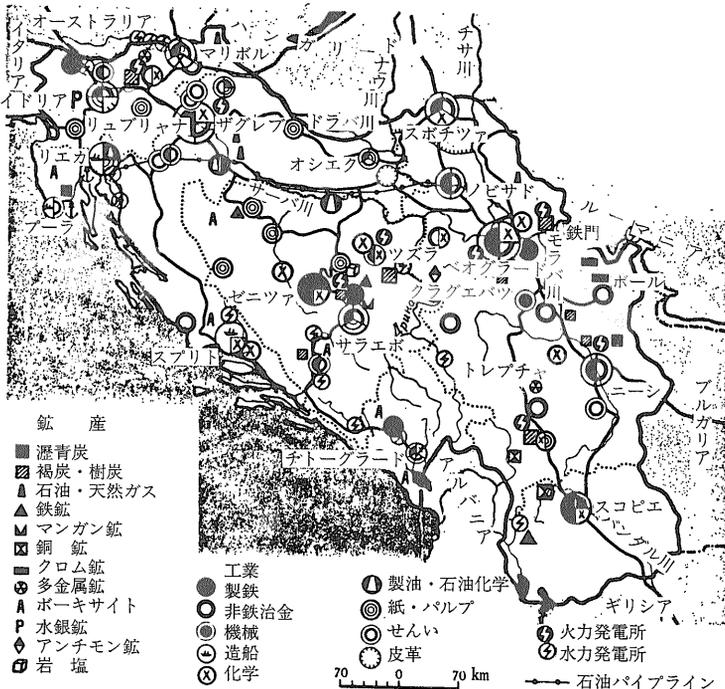
国土

ユーゴスラビアはバルカン半島にある。その国境線延長のおよそ3/4は社会主義諸国と 残る約1/4はイタリアおよびギリシャと接し 北東部にはドナウ川が流れ 西一西南は2,000kmにわたってアドリア海に洗われ そこには多くの湾や入江がある。しかし 奥地から海に達するには どの海岸にいくにもジナルアルプス山脈が障害となっている。そのため 交通路はジナルアルプスの山麓平野に発達し 同山脈に平行に走り それが中部ヨーロッパ諸国から中近東をつなぎ 中部と東部のヨーロッパ諸国とアドリア海の諸港を結んでいる。

住民

ユーゴスラビアには20の民族が住み ソビエトを除くとヨーロッパでは この国が最多多民族国家となる。人口の9/10は南スラブ系の民族で占められ セルビア族 クロアチア族 ボスニア族 モンテネグロ族は セルボクロアート語を用い スロベニア族とマケドニア族はそれぞれスロベニア語とマケドニア語を話す。セルボクロアート語は2種の文字を使用する。セルビア族とモンテネグロ族はキリル文字 クロアチア族とボスニア族はラテン文字である。小学生たちは主要4か国語と自国語を勉強するが 公用語はセルビア語 クロアチア語 スロベニア語 マケドニア語の4種。

人口は北の平野部と丘陵地帯 西南の狭い海岸帯に比較的集中し 北の人口密集地は重要な工業地帯であり 農業地域となっている。都市人口は全人口のおよそ2/5を占める。



第一図 ユーゴスラビア主要鉱工業配置図

経済の特徴

第二次世界大戦前にはヨーロッパのとり残された農業国であったユーゴスラビアも 戦後 社会主義体制 (当初はソビエト模倣型 1963年から労働者自治管理の自主独立型) をとり 鉱工業生産は急激に伸び 現在では国民総生産の半分を占めるようになった。しかし 農業の協同化と国有化は進んでいない。戦後生産の合理的な配置に努力が払われ とくに後進性がいちじるしいボスニア ヘルツェゴビナ モンテネグロ マケドニアの各地方とセルビア地方南部地域の開発が優先されているが まだ地域較差は大きく 失業者も多い。そのため 海外への出稼ぎ者が少なくない。

鉱工業

ユーゴスラビアの鉱工業は 主として国内天然資源に依存し 鉱物資源と森林資源の生産と加工 水資源の開発

が重要な地位を占めている。

エネルギー源としては 主として大型樹炭炭田・褐炭炭田と山地河川の水力資源が用いられ 最近では ドナウ川の《鉄門》地区でルーマニアとの共同の大多目的ダムと発電所群が建設されて電力の生産を始めた。石油は 生産が多くなっているとはいえ 需要を満たすにはまだほど遠く 多くは輸入に頼っている。

鉱業は盛んで 山脈地方がとくに金属鉱床に富んでいる。クロム鉄鉱 ポーキサイト 銅鉱 鉛—亜鉛鉱 アンチモン鉱 水銀鉱 希金属鉱の鉱量と探掘量はヨーロッパ有数で これらの資源を基礎に エネルギー資源開発の進展もあって 非鉄冶金工業はいちじるしく成長し その施設は大型鉱山の近くか 発電所の近くにある。たとえば アルミニウムの生産はスロベニア共和国(ドラバ川発電所系近辺)に集中している。また 現在では ユーゴスラビアは主として非鉄金属とその加工品

を輸出するまでになっている。製鉄はボスニア・ヘルツェゴビナ地方が主体で ユーゴスラビア最大の製鉄コンビナートはこの地方のゼニツァにある。

工業としては 電気工学機器 農業用機械 船舶など運搬用機械類の生産が多く その一部はそれぞれ輸出されている。化学工業は国内需要に全然追いついていないが 生産の伸びは大きく とくに原料の多くが輸入に依存しているとはいえ 石油化学の成長テンポはきわめて早い。紙・パルプ工業の成長もいちじるしい。

農業

ユーゴスラビアは所によって自然条件が大きく異なる。北部の低地と丘陵帯に比較的肥沃な大地が広がり 中程度の大陸性気候のもとにある。戦後 新政府は ドナウ川—チサ川—ドナウ川の水利・灌漑網を作り 開拓も積極的に進めたので 今ではこれらの地方がユーゴスラビアにおける小麦などの穀倉となっている。山岳地方は土地がやせ 気候もきびしい。アドリア海の島々や沿岸帯は北からの寒風が山脈にさえぎられるので暖かく 雨量も適度で オリーブや葡萄の栽培が盛んであり あんずの収穫量は世界一である。

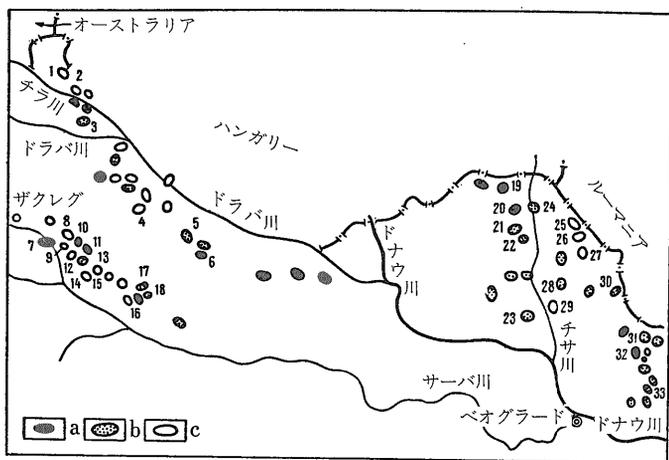
貿易

外国貿易額のおよそ2/5は社会主義諸国を相手国としたものであるが 残る3/5の主相手国は イタリア 西ドイツ アメリカ イギリスで 社会主義国の中で資本主義国との貿易額が貿易総額の半分をこえるのはユーゴスラビアと中国だけである。

わが国との関係

ユーゴスラビアは1945年10月に国連に加盟した。1952年4月に我が国との国交が恢復され 8月に公使を交換し 1957年に大使に昇格させた。

我が国との貿易額(1978年)は総額(往復)で 1億3,370万ドル(我が国の貿易往復総額の0.07%) 我が国からの輸出額が1億914万ドル(我が国からの輸出額の0.1%) 我が国への輸入額が2,456万ドル(同0.03%)にすぎない。



第二図 堆積盆地油田・ガス田分布概要図

a—油田 b—天然ガス田 c—石油・ガス田

図上の数字：

- | | |
|------------------|-------------------|
| 1—フィロフツィ石油・ガス田 | 18—プヤビツァ天然ガス田 |
| 2—ペテショフツィ石油・ガス田 | 19—パリチ油田 |
| 3—ムルスベジシチュ天然ガス田 | 20—ベレビト油田 |
| 4—シャンドロバツ石油・ガス田 | 21—ゴルニブレク天然ガス田 |
| 5—ペペラナ天然ガス田 | 22—アダ天然ガス田 |
| 6—ツァブナ油田 | 23—ゴスポジンツィ天然ガス田 |
| 7—エジェボ油田 | 24—ノビクニャジェバツ天然ガス田 |
| 8—クロシュタル石油・ガス田 | 25—モクリン石油・ガス田 |
| 9—イパニチグラード石油・ガス田 | 26—キンダバロシュ石油・ガス田 |
| 10—シュメチャニ油田 | 27—キンダ石油・ガス田 |
| 11—プンヤニ油田 | 28—メレンシ天然ガス田 |
| 12—ジュチツァ石油・ガス田 | 29—エレミル石油・ガス田 |
| 13—オコリ天然ガス田 | 30—メダ天然ガス田 |
| 14—スツルジェツ石油・ガス田 | 31—ベリカグレダ油田 |
| 15—ムラモルブルド石油・ガス田 | 32—ヤノシク油田 |
| 16—リボブリヤニ油田 | 33—ニコリンツィ天然ガス田 |
| 17—ヤナリバ天然ガス田 | |